る尊王討幕の「志士」運動の主体は、草莽浪士といわれたように、庶民と下級武士の同盟体で、草莽の方が、二、三あげた例のようにうしろにおって、志士の方は弾丸となっていることが多いのです。このような草莽浪士の同盟によって、チャンバラもので知られているような血なまぐさい改革ができたのです。ところでそのばあいの草莽というのは何かということなのですが……。

3　徳川時代の資本主義と草莽

ここで徳川時代の経済的な発展段階が何であるかという問題にうつることにいたしましょう。徳川時代というものは、封建制度であります。全国三百諸侯――じっさい二百六十いくつかの殿様にわかれて、そのうちとりわけゆたかな関八州と、全国の有数な鉱山地帯や商業都市や海港を、徳川幕府がにぎっていたのです。その徳川家の八百万石を先頭にして、外様（とざま）として加賀の百万石が一ばん大きく、一ばんドン尻が一万石のもろもろの木っぱ大名という配列で、日本全土三千万石が三百諸国にわかれていたのです。そして徳川幕府がいっさいの政治をにぎっているのですが、これはいわば、三百諸侯の連合体の旗がしらが徳川将軍家となっているかたちでありまして、たとえ一万石の木っぱ大名でありましょうとも、総司令官すなわち将軍たる徳川家の命令にはしたがいますが、内政のうえでは独立の一国をなしているのでありまして、諸侯は徳川家に税金をおさめねばならぬ義務はもっておりません。加賀の前田が百万石といういみは、米を年間百万石産出するだけの田地田畑を前田家が所有し支配しているということでありまして、五公五民ならばその百万石のうち五十万石が年貢として収入され、この収入が前田家とその家臣団に分配される

というしくみです。そんなわけですから日本全土は、財政的にも政治的にも、けっして「統一」されてはおらなかったのであります。

幕府領は天領といいましたが、天領でも殿様領でも、百姓は「五公五民」で、「殺さぬように剰さぬように」しぼられながらくらしをたてているのですから、これは純粋な封建制度です。ヨーロッパ諸国民の歴史のうえでも、こういう封建制度のくらくながい時代が、農民の搾取のうえにきずかれていたのです。武士はほんらい、農民から年貢としてとりあげたさまざまの現物や労役で日常生活が保証されているために、堺から武器を買ったり、紅おしろい、どんす、きんらん――これは奢侈用ですが――を京都から買ったりする以外には、銭（ぜに）をつかう必要がなかったものです。

ところが江戸ができあがってみると、ロンドンとくらべてすらもけっして劣らないだけの人々をもっていました。鉄砲渡来以後、戦闘形式に大変化がおこって、大量の兵団をうごかす集団的な野戦が決定的な勝負どころとなり、城もこれまでの山賊のとりでのような山城から、交通便利な軍糧の供給地にとりかこまれた平野にうつされ、将校から兵卒にいたるすべての武士が村を去って妻子とともに城下にすむしくみとなり、これに物資を供給する商家や職人がいらかをならべて、一国の政治ばかりでなく、商品経済の中心地になるという状態が現出します。それもはじめのうちは職人が注文をうけて、たとえば鎧甲細工の櫛笄をコツコツつくる。あるいは百姓が年貢作りの片手間につくった野菜などを売りにだす。職人は徒弟をつかい、その徒弟がやがてのれんをわけてもらって、一軒の職人になるという寸法ですが、しかしこんなことでは、いつまでたっ

ても大量の商品をつくることはできません。しかるに時代がすすむにつれてもっと大量の商品が、一城下、一国内の需要をみたすためばかりでなく、ひろく他国まで評判をとって、その国もとを富ませるように、くふうされてきます。越中富山のくすりだの、石見銀山ねずみとりだの、名古屋名産もりぐち大根、砂糖は四国の三盆白、河内木綿に丹後ちりめん、縞木綿なら桐生足利、コンニャクならば水戸コンニャクといったあんばい式です。はじめは武士階級だけの需要であったものが、だんだんと一般庶民、農民まで商品を買うようになってくるのです。ほんらいこれらの商品は庶民すなわち百姓――草莽――が生産したのであって、殿様や武士がつくるのではありません。そして商品生産者はつねにある特殊の商品の生産に専念することで大量をつくりだしうるのであって、したがってじぶんがつくらない商品としての生活必需品や原材料の購買者でもあるわけです。商品生産の発展は、商品市場の発展とうらおもてをなして相互に作用してゆきます。

ほんらい、封建制度は自然経済に、つまり自給自足で銭をつかう必要のない経済に、もとづいており、商品経済というものはこの自然経済のたてまえを遠慮なく破壊して、封建制度の「質実剛健」をむしばむものですから、寛政の改革とか天保の改革といった一連の改革は、おごりを禁じて商品の生産や流通がせばまる方向にひきもどそうとするものですが、人為をもって経済上の必然をひきもどすことはできません。商品生産はえんりょえしゃくなくいっそう発展し、その過程のうちに、いやおうなしに資本家的な生産様式がおこってまいります。資本家的生産様式というのは、賃銀労働者をやとって大量な商品をつくることです。このことはいわゆる産業革命――すなわち機械や蒸気力をもちいる近代的な大工業生産がおこなわれるずっといぜんの段階に、従

前の手工業的な手労働だけにもとづく賃銀労働者による生産の形ではじまってくるのです。それは都市の手工業者のあいだからも、おこってきますが、なかんずく農村地帯で、桐生や足利の織物業のように、賃銀労働者を農民の子弟から供給されて、おこってきます。はじめは工場らしいものを形成しない。桐生とか足利とかの天保時代における織物生産には、大掛りな工場はありません。織元というものがあって、大量の生糸を奥州方面から買ってくる。木綿糸ならば、関西方面から大量に仕入れる。そしてその年々の流行にしたがって、織元がもっている染工場で一定の縞柄に染める。染めあがった糸を、たて糸よこ糸一反ぶんずつにそれぞれくくって、農家にくばりさえすればよいところまで準備する工場をもっています。小さな工場であっても、みな賃銀労働者をつかっているから、徒弟をつかう親方の職人仕事とは性質を異にするブルジョア的生産です。そして番頭をつかって、この染めた糸を百姓家にくばる。百姓家では、くばられた糸を、そこの娘さんやおかみさんが、賃機（ちんばた）で織りあげる。百姓はむかしから自家用のために機（はた）を織る。どんな百姓家にも一、二台の機があって、蘭もじぶんのうちでとり、糸も自分の家でつむぎ、ただ染めることだけは村の紺屋にたのんで、野良着ふだん着はもとより、娘の晴着から主人の紋服までつくったのです。いわゆる自然経済であり、自家消費用の農家家内工業であり、商品生産ではありません。

ところが天保時代の桐生、足利の農家は、散歩しながらみただけではいま申しました自家用の機織りとちっともかわりませんが、じっさいは自家消費のためでなく他人が使用するための商品を、賃銀をめあてに織っていたのです。こうなると農家の娘やおかみさんは、実際上の賃銀労働

者です。彼女らの織るその原料は、織元の手から大量に染められてくるのです。つまり織元の糸染工場と廊下つづきということになる。糸染工場のつぎの行程の外業部ということになっているのです。眼でみたところでは、少しもむかしとかわっておらないが、事実上このような賃機の賃労働者になっている農家が、一軒の織元について数十人、多いばあいは数百人、村々に散在して、資本の支配のもとにはたらかされていたのです。

もっとすすんでくると、農家からむすめたちをやとってきて、織機を一部屋に何十台とならべて織らせるしくみが、賃機とならんで採用されてくる。これはもうはっきりとだれの目にもみえる現実の工場であり、賃労働にもとづく資本家的な工場です。天保時代の桐生、足利では、越後あたりから、ときにはもっと遠国の奥州あたりから安い織子をかかえこんで、まるで監獄部屋のような女工部屋からだしいれしながら、機を織らせたものです。その賃銀は奴隷的で、はなはだ安いものですが、賃銀にもとづく工場生産であることにはちがいはないのです。このばあいは、百姓家で織らせるよりも、能率があがってくる。一つの部屋で織子は、朝から晩までいっしょうけんめい織ってさえおればよく、たとえば箴のよこ糸がなくなっても、それ専門の幼年工が走ってきて補充してくれるから、機台から降りる必要がないというふうです。そこには分業にもとづく協業がおこなわれていて、一軒の家でひとりでなにもかもやっているときよりも生産力がぐっとあがるわけです。機械はまだどこにも採用されていないむかしのままの手工業ですが、分業にもとづく協業すなわちマニュファクチュアが、資本家的な条件のもとで実現されているのです。いまや糸ばかりではなく、織機も、織場も、織手の所有物ではなく資本家のものであり、織子自

身は賃銀でやとわれて、雇主の命令のままに作業している。

これは日本だけのことではなくすべての国の歴史がしめすとおりに、最初の資本主義はマニュファクチュアの段階をもって発生しますから、『資本論』でもこの段階を、すこぶるくわしくかいてあります。

徳川時代には資本主義がなかったという説が、かつて経済史家のあいだに信じられていたのですが、日本が十九世紀にはいりこんだばかりの文化、文政、天保時代には、このように織物工業がりっぱなマニュファクチュア時代を出現しているばかりでなく、そのほかにも、砂糖とか、カツオブシとかコンニャクだとか、ローソクだとか、広汎な生活必需品の商品生産部面に、マニュファクチュア時代が到来していたという説をたてたのはわたしであります。じらい、この徳川時代における資本主義の有無についての論議が、こんにちになってもなおいろいろなかたちでおこなわれておりますが、徳川のすえ、すくなくとも天保時代では、採鉱、冶金等の産業部門はもっと早くからのことですが、軽工業部面すなわち生活必需品部面の商品が、マニュファクチュアの段階にあったことは、否定できないことをみとめられているのであります。ただこのばあいに注意しなければならないことは、マニュファクチュア時代の特徴をみるためには、桐生や足利の機織工場をしらべただけでは――水戸コンニャクにしても、袋田の大仕掛な水車小屋で粉にするのですが、その製粉工場だけをしらべただけでは、マニュファクチュア時代の本質的な構造はわからないのです。この工場と連結している百姓家のなかでおこなわれる労働――それは事実上、工場に従属しているので、これをみおとしてはいけないのです。それは賃機のような形で直接的に

従属しているものもありますが、間接的に農民の商業的農業が、マニュファクチュア時代の資本主義的生産とむすびついております。一例をあげれば、河内木綿というものがあります。木綿は徳川時代の広汎な商品ですから、全国的に市場をもっております。桐生、足利の縞木綿も、全国的に有名ですが、河内木綿の全国的なのにはおよびもつかない。ところが、この河内木綿は、木綿は木綿でも、製品としての綿布ではなく原料としての綿花なのです。

河内木綿のできる河内平野にゆくと、みわたすかぎり綿畑ばかりなのです。このへんでは米をつくらずに綿ばかりつくっているのです。しかし領主の帖簿のうえでは、米をつくっていることになっているし、じじつ米でもって年貢が納まっている。と申しますのは、綿をつくって、これを仲買人に売りわたし、その売ったお金で米を買って殿様に納めているのです。そのように大量の河内平野の綿は、一部が年貢米にばけているわけですが、しかしここでは、マニュファクチュアでも何でもなく、農民がただ綿を商品として生産しているだけなのです。掟のうえではたんぼに綿をつくってはいけないということになっているのですが、それをやぶって綿をさかんにつくっている、こういうばあいには農業も商業的農業ということになってくる。おもしろいことには、農民はそのばあい自分のたべる米まで買うという結果をみるのです。こういうように大量な商品生産に農業がはいりこむということは、つくられた商品（綿）を加工する面で大量的な商品生産がマニュファクチュア時代の高さでおこなわれているということが前提されています。綿は、白木綿に織られるまえに糸につむがれる。紀州藩では、河内木綿を藩自体が経営者となって仕いれて、貧乏な家来や百姓たちに糸につむがせて利潤をかせいだ。このばあい、内職にその糸をつむ

ぐ人々は賃機の織子とおなじような事実上の賃労働者です。一方では、こうしてできあがった糸をこんどは紀州藩から買いとって、大量に縫糸に加工したり白木綿に織ったりする製造業者がある。その白木綿をさらすその晒の工程もマニュファクチュアです。織りあがる工程もマニュファクチュアです。けれども河内木綿が農民の手もとで栽培される過程は、賃銀労働によるのではなくて、これは独立の商業的農業です。それが問屋の手をへていろいろなところでしだいに加工されてゆく過程のどこかでマニュファクチュア生産の関門をくぐる。そのぜんたいの構造を、みきわめることが必要です。

讃岐の三盆白とよばれた白砂糖の生産工程についてもおなじようなことがいえるのです。北九州の蠟の集荷から加工についてもおなじことがいえるのであります。それが織物についてもはっきりするのです。

河内木綿をはじめとして、瀬戸内海沿岸は一帯に木綿の産地だったのですが、それはわたに加工されたり白木綿に織られたりして、すべて一たんは大阪に集荷されます。それを大阪でつみこんだ船が瀬戸内海をとおり、下関から日本海にでて、沿岸づたいに荷をおろしながら最後は蝦夷、つまり松前が終点になる。こんどは松前の海産物をつみ荷にして、港々で出羽の米、越後の塩天、富山のくすりはまさか舟積みにはしないでしょう、もとのコースを大阪まで逆もどりするのが、日本内地における最大の交易ルートなのです。仙台領の米でも、大阪むけのものはこの基本ルートをとおってつみこまれる。江戸から奥州への輸送すら、金華山沖をとおるのはきらうのであります。そのわけは、幕府が大船の建造を禁止していらい、船が小さいために、しけるばあいには、

和船では乗りきれません。ですから金華山沖をとおるルートは蒸気船ができるまで発達しません。遠州灘、紀州灘といったルートも小さな和船では危険なので、「あれは紀の国、みかん船」といわれたとおり、江戸にはいるのには、いつも海上の冒険がつきまとう。

これに反して、瀬戸内海、日本海のコースは、和船でも大丈夫ですし、しけるばあいには、ふんだんにある港々に逃げこめるから安心です。仙台と関西の物資の交流も酒田港で川船にかえ、最上川をのぼっていまの山形市あたりから馬の背中につんで仙台にはいるのが、幕末までの正規のルートなので、大阪仕立ての古着類や安木綿や綿や砂糖や、といった大量の商品が、このルートではこびこまれたものです。

酒田の港口で海から川船につみかえるときに、税金をとられる。領主の酒井家（鶴岡藩主）が譜代大名の東北鎮台たる権威と地理にものをいわせてかすめとる税関なのです。その酒井家が酒田の「草莽」である本間家から、多大の借金をしているために、この税関を本間家に請負わせる、つまり借財の抵当に、税関を売ったようなものです。「本間さまにはおよびもないが、せめてなりたや殿さまに」という有名なうたの本間家の富は、こんなやりかたで、あのように大きくなったのですが、これは余談としまして、とにかくこういう全国的なルートが、大阪を中心にして発達しているじじつは、封建制や自然経済からは、けっして解けません。

天保時代には、工業的に加工された商品として流通している品物の大部分は、資本家的につくられていたということができましょう。もちろんその時代の商品ぜんたいのなかに、商品としてつくられたものでない商品——たとえば諸侯が年貢としてただで百姓からしぼりとった米がしめ

る割合だの、また、諸藩の「国産会所」が買上げるとは名ばかりで、価値以下で農民からとりあげた長州の半紙だの薩摩の黒砂糖だのといった「半」商品がしめる割合も少なくないでしょう。けれども資本家的につくられた商品だけがますます堅実に、いよいよ大量に、その比率をたかめていったということだけはたしかです。三百諸藩みずから自給するというたてまえの封建制度が、このようにして全日本的なブルジョア的市場関係に組みこまれるようになったのです。このことは封建制度の体内から資本主義的生産関係がうまれでるコースとして、これはひとり日本のみならず、世界中どこの国でもおなじことがいえるのです。

4　かえりみられぬ農民一揆

そうなりますと、本質上、地方分権的で、本質上、自給自足主義のうえになりたってきたところの封建制度という存在は、資本主義的な商品生産の発展の邪魔になってくるのです。じゅうらい全国の武士と殿様は、現物の年貢をとりたてていたのですが、商品生産の発達にともなって、さきに河内木綿についてみたように、表面の形はくずれていないようにみえて、じっさいは逆のものになってしまう。社会的な力関係のうえでも、武士と町人の実力関係がてん倒してくるのは、太宰春台（一六八〇—一七四七）や蒲生君平（一七六八—一八一三）が、大名は金主をみて鬼神をおそるるごとくなったとか、大阪の豪商ひとたび怒って天下の諸侯おそるるの感ありといったはなしや、梅辻規矩守の「斉庭の穂」（一八四八、天保十四年）という本に、大阪町人から全国の大名の借金が六千万両ある。諸大名から三都の市場にだす米は四百万石あるが、そのうち三百万